

第 19 回大阪大学野田村サテライトセミナー 「薬から学ぶ人々の多様性」

2014 年 9 月 11 日、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムのもと開設された「大阪大学野田村サテライト」にて、「第 19 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回は、薬から見る人々の多様性をテーマにセミナーを行いました。講師には、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム特任助教のモハーチ・ゲルガイ先生をお迎えし、およそ 1 時間半ご自身の研究についてお話していただきました。

今回のセミナーには、15 名が参加してくださいました。また、今回も、遠隔教育システムを使用して、大阪大学吹田キャンパスとつなぎ、同時中継でセミナーを行いました。

まず、西洋医学の目的が 1 種類の薬ですべての人の病気を治すという考え方を目標にしてきたということを示し、この考え方の裏には、人体の普遍性、つまり、全ての人は基本的に同じ人体を持っているという思想があるということから、発表が始まりました。しかし、人体は必ずしも同じものではなく、文化によって身体は異なるということに薬に着目して明らかにしていこうとしたということの説明してくださいました。そして、研究の目的が、薬を通じて伝統文化と科学の摩擦、人間とモノの関係、生死の多様な価値観を人類学的に解明していくという点にあるということの説明してくださいました。



講演されるモハーチ先生

続いて、モハーチ先生の自己紹介から、なぜ現在の研究テーマにいたったのかの説明に移りました。モハーチ先生は、数多くの国々と国境を接しているハンガリー出身で、幼少の頃から多文化に接してきたそうです。その中で、多文化や多様性に興味を持ち、そのような研究のできる人類学の道に進んだとお話しされました。そして、日本に来た理由としては、漢字へのカルチャーショックを挙げられました。

最後に、モハーチ先生の研究テーマである持病に関する多文化というお話に移りました。その中でも今回は特に、糖尿病患者への調査をもとにお話をされました。糖尿病は一生治

らない病気であることから、自己管理が必要とされていると述べられました。そして、医療現場での参与観察等を基に、薬を「処方」するだけではなく、(1) 薬を「身につける」、(2) 病気を治すという方針より、「病気と付き合う」という価値観のユニークさについて論じ、さらに(3) 実験とケアは互いに反発しあうものではなく、相互補完的なものであるという研究結果を発表してくださいました。



会場のみなさん

発表終了後、大阪大学吹田キャンパスでの参加者からの質問として、「参与観察を続ける理由は」というものと「この研究がいかに役立つのか」というものがあげられました。前者の質問に対して、モハーチ先生は、病の語りは、それぞれの患者特有のものがあり、それを聴くためにインタビューを行っていることと同時に、インスリン注射の日常的なルーティンなど言葉にして説明しにくいものは、実際に現場で経験し理解する方法しかないと答えられていました。後者の質問に対しては、「薬を飲む癖を身につける」や「病気と付き合う」など、つまり実践されている方々が暗黙の裡にわかっていた実践や価値観を外部者として概念化することで、文化や専門的な違いを超えて伝えることで、慢性病治療の向上に貢献できると述べられました。また、野田村サテライトでの参加者からも、「薬ではなく食事という観点から研究はされないのですか」という質問がありました。この質問に対して、モハーチ先生は、たしかに食事という切り口での研究はあるが、医療の現場では薬による効用のほうが明確な課題であるので、食事だけでなく薬に注目することが理解において大切なのだと答えられました。

第19回大阪大学野田村サテライトセミナーは、活発な議論によって、セミナー中が盛り上がった雰囲気であったのはもちろんのこと、終了後の懇親会でも会場の熱気そのままに貴重な意見交換がなされました。次回セミナーは10月11日に八戸高専から河村教授をお迎えして毎年8月に行われているシャレットワークショップについての報告をしていただく予定です。